The Osaka University Library Bulletin

大阪大学図書館報

Vol. 2 No. 1 Jan. 1968

アメリカの図書館を視察して

附属図書館長　宮　地　　徹

一般に図書館をもっとよくするのには，国立綜合大学に情報図書館学科（わが国では慶応大学にただひとつある）をつくってもらって，図書館の幹部や，情報・ドキュメンテーションで活躍する人々を養成し，研究を進めてもらうのがひとつの方法であろうとかねて考えていた。それには，先進のアメリカの図書館学部（Library School）をみたいと思っていたところ，昨年8月から9月にかけての50日間にわたってそのような機会をえた。そして，図書館学部をみるかたわら当然のことながら，ワシントン，ニューヨーク，ボストン，クリーブランド，シカゴ，サンフランシスコ，ロスアンジェルスなどの図書館を見た。同行は，本学図書館にいた文部省情報図書館課の田保橋係長である。

建物や人件費は，国によって特色があるので，ここにあげてもどうにもならないので省くが，大学における図書館の地位の重要さははるかに大きい。ライブラリアン（司書）が教授であり，助教授に任命されているが，わが国と同様に各学部と対等の地位にあり，学習図書館（Undergraduate Library）と研究図書館にわけられるのも同様である。そして，ハーバード大学，ミシガン大学をはじめとして，各大学は立派な学習図書館をつくろうという傾向がみられる。最も大きい相違は，一切の図書購入費をふくむ予算が学部と無関係に立てられていることである。従って，わが国で重視されている図書の集中化や全学利用は，今さら声を高くするべきことではなく，必要があれば別の予算で図書館をつくるという態度で，図書や雑誌の選択購入は図書館員の仕事である。そのために，図書館員は，研究者にまさる図書の知識をもっていなければならない。大きい大学の中央図書館は年額20億円をこえる予算のものが多いし，研究（学部）図書館でも5億円をこえるものもすくなくない。これでは，研究者が図書館と競争して研究室の図書を充実する気もおこらないし，その必要もない。ただ，いつも手近におきたい本を求め

るというくらいで，たとえ研究者が研究費または講座の費用で，図書室をつくって完備しようが，図書館とは無関係である。図書館をよくするのには，独立した予算を与えるべきであるというのが，アメリカの図書館をみての最も強い印象であった。

立派な学習図書館をみて思うことは，アメリカには及ばないにしても，大阪大学本館をもっとよくすることができたらということで，参考係を充実し，視聴覚室を整備して，学生の知識欲にこたえ，これをかきたてるようにしなければならないということである。その他，図書館，殊に大学のそれが，稀こう本，美術に関する書物そして地図を収集することに努力していることなどは注目すべきことであった。

図書館の仕事を速かに，そして正確に行うために機械化を大いにとりいれようという動きが大きい胎動をしているようである。これは，文献の処理と，出納・購入などのいわゆる図書館業務にわけられる。前者で最も進んでいるのは，国立医学図書館（National Library of Medicine）で，年間2500の医学関係雑誌にあらわれる論文を分類し，計算機にいれて，その情報をとり出すという業務が機械的に行われ，印刷されて Index Medicus その他のものとして毎月出版されている。同様なことは工学，理学関係でも進んでいて，マサチュセッツ工科大学を中心として INTREX というシステムで行われようとしている。人文系でも同様なことが行われていて，ハーバード大学では，その蔵書リストは計算機で印刷され，Harvard Book Shelf Listとして出版されている。これは，このリストによって，自分の図書館にないものを購入し，或は相互貸与の材料とするとともにハーバード大学が徹底して蔵書の充実を誇っていることを示している。また一方では，業務用に電子計算機を用いている図書館もあるが，決定的なものはないようであった。電子計算機の進歩が著しいので，これが最もよいというのが出るのは，数年以上かかるであろう。

アメリカの図書館で恵まれていると思ったのは，国会図書館が大きい予算をもって世界一の図書収集数につとめるとともに，アメリカ中の図書館にサービスしていることである。どの大学も，この本を購入するということを国会図書館に通知して，L. C. カードとよぶ図書カードを送ってもらっていることなどはその一例である。初めにのべた図書館を重要視するということのあらわれであろう。

図書館で興味があるのは，New York Public Library で，これはアメリカにおいて，国会図書館，ハーバード大学についで蔵書数第3位である。ハーバードは95の図書館にわかれているので，単一館として第2位で約300万冊といわれている。この図書館は一切の貸出をしないので，蔵書は必ずみられるという仕組みになっている。ニューヨークに中心をもつアメリカ出版界や商社の利用もはげしいもので，このようにすることも必要と思われる。Public といっても，ニューヨーク市から援助をうけていないので，経済的に独立しているのも面白い。もうひとつはシカゴにある Center for Research Libraries で大学が力を合せて，収納用図書館をつくっていることで，大学において利用度の低いものを集めている。但し，二部あるから一部というのではなく，一部しかないものだけ受取ることにして，利用される可能性を高めているのも興味がふかい。いいかえると，これは，無用なものを集めるのではなく，有用だが利用度は低い出版物を集めているので，実物貸出しをして，複写サービスをしないというのも手数を省くためであろう。わが国でもこのような図書館も考えるべきものと思われる。

大学の心臓を強化する

梅　溪　　昇

私は人文科学に属する歴史学の研究，とくに日本の近・現代史の研究に従事する一員であるが，近年頻繁にアメリカから来日する日本の近・現代史研究者——教授のみならず，学位論文の作成を目標としている大学院学生らと接触して，とくに痛感することは，かれらが各自の研究課題に関する，日本の研究者の諸活動や関係文献，オリジナル史料の所在ならびに聴取調査の対象とすべき人物の経歴などについて，私以上に詳細かつ広範な諸情報を有していることである。そしてかれらの多くは，これらの諸情報を基礎に，日本で精力的な史料収集や研究調査を行ない，比較的短期間に成果をまとめ，注目すべき論文・著書を発表する。その研究生産力は，少くとも現在の日本における現代史研究に関する限り，はるかに日本より高いといわなければならない。アメリカにおけるこの方面の研究が先進した背景には，終戦時に日本の関係史料がアメリカに持ち去られたという特殊な条件が存するのであるが，今やそれらの史料はほとんど日本に返還されているのであるから，当該史料の利用その他が円滑にさえ行けば，アメリカ人学者・学生による研究成果を上まる業績が出るべきはずであるが，遺憾ながら現在の状態はアメリカにかなり水をあけられているといえよう。

こうした彼我の格差が生ずる最も大きな要因は，アメリカにくらべて日本には充実した図書館活動，とくに組織的なレファレンス・サービスが欠如しているためであるといってよかろう。私は，国大協にも最近大学図書館制度特別委員会が設けられ，図書館の充実に関して熱心な討議が重ねられ，また日本の大学図書館におけるレファレンス・サービスを一層高める必要性のあることは，かねてから自覚したライブラリアンらによって唱えられていて，関係者が現状を打破し，図書館活動の前進のために，それぞれ努力されていることを十二分に知っている。にもかかわらず，アメリカと対比して日本のレファレンス・サービスを酷評するのは，一つには日本の大学図書館活動の近代化・組織化の問題は，すでに論議の段階ではなくて，実行の段階であり，しかもその実行が遅れるだけ，それだけ総体的な日本の研究生産力は低下することになるのを深く憂えるからであり，二つにはレファレンス・サービスの充実・向上に対する研究者側—とくに人文・社会科学系—の要求熱度が全体的にみて低いと感ずるからである。

近年，科学技術の進歩とともに，世界の科学技術文献の量は加速度的に増大するにつれて，自然科学方面においては，レファレンス・サービスなしに研究者は研究を推進できなくなった。そのため，ともかくレファレンス・サービスは自然科学方面において進んでいる。一方，一般に人文・社会科学方面では，孤立分散的な学問研究の形態が伝統的に踏襲され，研究者自身で情報収集に時間と労力とをかけていて，レファレンス・サービスの利用に慣れていない。しかしながら，今や共同研究・地域研究・比較法・比較文学・国際理解などが重視される傾向から，諸学問相互間の連繋が強くなり，またいろいろな言語・形式によって発表される文献などについての情報を必要とする度合は飛躍的に増大しつつある。さきの日本現代史の研究などはその適例である。研究者にとってレファレンス・サービスが不可欠なものであるのは，人文・社会科学方面でも異なるところがないまでに時代は進展している。そこでは各研究者が，よりよい，より高い図書館活動—レファレンス・サービスをえられるか否かが，ただちに研究業績の高下を左右するといってよいであろう。

しかし大切なことは，研究者がそのサービスをあたかも据え膳として受け取ってはならない

ということであろう。そうした態度があれば，いたずらにライブラリアンを雇用人視してそのサービスの足らないことに不満を抱く結果になるというものである。レファレンス・サービスは，研究者の情報獲得要求の熱意とライブラリアンの情報収集・提供の熱意とが融合するときに飛躍的に向上し，充実するものである。需要のないところに供給はない。

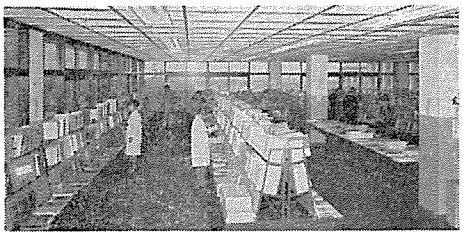
しかしながら，理想的にいえば，ライブラリアンの側において，大学における各研究者の欲する情報の種類がそれぞれ適確に把握されており，研究者からライブラリアンへの要求という方向のほかに，ライブラリアンから研究者への積極的な情報提供の方向が存在するのがのぞましいのである。麻酔科学の進歩によって外科学が偉大な発展を遂げたといわれるように，ライブラリアンの質的向上が大学における研究発展を導くものであり，ライブラリアンと研究者との呼吸の合った協力こそが肝要であると信ずる。

図書館はいわゆる大学の心臓である。そして図書館がいたずらにその蔵書数の膨大さを誇る時代，蔵書の保管を使命とした時代は，すでに過ぎ去ろうとしている。今や学問の進歩は一大学図書館，いな一国の図書館のみの蔵書でまかなえなくなってきている。Reference Department の充実が一般に要請されるゆえんである。

本学がここ十数年来の関係者の努力にかかわらず，このような要請にこたえる Central Library をまだもっていないことはきわめて残念なことである。現状においては，日本における3年ないし5年の研究よりも，アメリカにおける大学図書館の1年の利用の方がより能率的であると感ずるのは，ひとり私だけではなかろう。アメリカでは，campus 周辺に dormitory を擁しているからではあるが，夜に入っても10時あるいは midnight までこうこうと輝く各大学図書館を眺めると，いかにも大学の心臓がたえまなく活動し，大学が生きているように感じられる。夜の6時ともなれば，すっぽりと闇間に消える，今の豊中館をみると，私は堪えられない気持がする。

私自身は，完備した Reference Service, Graduate Reserve Service, Interlibrary Borrowing Photoduplication Service, Carrells, Typing Room, Self-Service Camera, Microfilm Reading Room, Newspaper Reference Room, Periodical Reading Room などの機能や設備をもつためには，将来新たに Central Library を main campus に建築すべき必要があると考えている。そしてそこに有能なライブラリアンが集まり，各研究者ならびに学生との間にレファレンス・サービスが十分に行きとどくとき，本学の教育と研究とが飛躍的に前進するものと期待しているのである。当局者の奮起はもちろん，本学全員がこの本学の心臓をいかにして強化するかの問題解決に協力一致すべき秋に際会しているのではあるまいか。（文学部教授・図書館委員）

「世界理工学図書・雑誌展」 出版文化国際交流会と附属図書館の共催で11月27日より29日まで本館3階に於いて開催された。この図書展にはアメリカ・イギリス・ソ連・東西ドイツを始め世界16カ国の理工学一般書・数学・物理学・化学・生物学・地学・工学（建築・機械・金属・原子力・電気等）専門書約3,500点，日本より最新版専門図書約1,000点が展示された。期間中の入場者は約1,000名であったが，そのうち教職員は20%位で残りは学生であった。会場で注文された図書は約70点程であったが，内容を見るとロシア語図書・Scientific American 等が学生の間では好評のようであった。



アメリカ図書館協会代表者との懇談会

日米図書館界の相互協力について

日本とアメリカにおける学術研究図書館相互間の協力関係を緊密化するため，昨年２月当時のアメリカ図書館協会国際連絡局長であったバックマン氏が来日し，本学図書館中之島分館で近畿地区国公私立大学図書館の代表者が参集して懇談会を開催したが，この計画をさらに進めるため11月にバックマン氏ほか２名の代表者が再び来日したので，同月21日(火)午後１時30分から５時まで中之島分館で前回同様の会合をもち，活発に意見を交換した。アメリカ図書館協会からの出席者及び発言テーマは，トーマス・バックマン氏（カンサス大学図書館長）―大学図書館の管理とアメリカ図書館協会の国際協力活動―鈴木幸久氏（ミシガン大学アジア図書館長）―アメリカにおける日本資料の現状と問題点―ウォーレン・常石氏（アメリカ議会図書館極東部長）―アメリカ議会図書館と極東関係資料―であった。懇談の内容は主として日米両国における研究図書館で改善を要する問題点の指摘をし，これに対して日米両国図書館界の相互協力によって改善する事項及び方法などであった。

なおこの会合には米国大使館広報文化局文化本部司書担当官セオドアＦ・ウエルチ氏と京都アメリカ文化センター館長シドニーＬ・ハモルスキー氏が出席した。

会　　議

―日本医学図書館協会総会―

第38回 42.11.8(水)―10(金)　於　久留米大学医学部

第38回総会が全国の医学関係図書館の館長，司書約140名参加のもとに開催され，次の協議題について討議がなされた。①重複資料の交換による資料の経済的収集，活用　②医学図書館相互の文献情報交換の迅速化，能率化を目的とするTelex設置の促進と普及　③包装の破損等による還付不能外国郵便（外国雑誌）の入手方法　④医学雑誌の創刊，廃刊，合併，改題等を明らかにする Vital Notes on Medical Periodicals のための情報提供　⑤日本医学図書館協会相互貸借規約の改正　⑥専門分野別医学文献専門センターの設置　⑦国費による医学文献情報センターの設置。　本年は日本医学図書館協会創立40周年に当るので，その記念式典も同時に挙行され，医学図書館関係物故者への黙禱に続いて医学図書館活動に多大の貢献を成した功労者，永年勤続者を表彰した。また九大図書館長北川敏男教授による「将来の大学図書館」と題する記念講演もあった。

――学術研究図書館研究集会(大阪集会)――

42.11.20(月)～22(水)　於　本部第5会議室

大学におけるリサーチ・ライブラリーの管理運営の諸問題について討議するため，これについて造詣が深い慶応義塾大学文学部図書館学科訪問教授エベレット・ムアー氏を講師にして，同大学主催のもと，本学図書館を世話役に，西日本各地の大学図書館の館長・事務長など相当の経験年数を有する管理者または上級幹部要員を約50名集めて行なわれた。本学からも役員，受講者，オブザーバーなど10数名が参加した。そして大学図書館の当面する諸問題と将来のビジョンについて討議した。テーマ次のとおり。

第1日　学術研究図書館の機能
第2日　学術研究図書館における文献情報サービス
第3日　学術研究図書館における機械化の動向

――中之島分館運営委員会―第28回――

42.12.20.(水)―4.00～5.30 p.m.　於　中之島分館会議室

①学生の図書館会議室使用　現行どおり：指導教官を責任者とし，その同席を条件にみとめる　②微研への図書の貸出　製本済雑誌は利用者が直接来なくても自動車便で借出・返却できる。新着雑誌は次回再検討　③ Chem. Abst. を蛋白研に返還する件　蛋白研資科室の雑誌は製本後図書館に納めているが C.M. は例外として蛋白研へ返す。

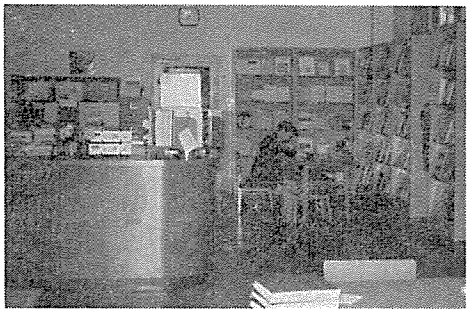
――図書館委員会――

42.12.22(金)―4.00～5.30 p.m.　於　本館小閲覧室

審議事項　①予算節約に伴なう本年度図書館維持費等の修正案を原案どおり承認し，本館の視聴覚室を充実するため増額された予算については教養部等の関係教官の意見を聞いて，その使用を決定することをも承認した　②医療技術短期大学から図書館委員会の委員を選出したいとの要望については大学としての方針があれば，それに従って考慮することにした　③本館書庫棟の増築は実情上遅延できないので，早期実現を期することを申し合わせた　④学部の学生にも指定書制度実施の必要性を検討する資料として各学部教官に指定書のリストを提出してもらうよう学部長を通じて依頼することにした　⑤図書館に印刷室を設置する案について審議したが，なお具体的に検討することにした。

☆☆☆ 分館めぐり(1) ☆☆☆

— 薬学部分館 —



数年前まで狭い場所に人間と図書と複写機が全く同居してひしめき合っていた分館も，昭和37年に具体的改築計画がたてられ，40年度に漸やく分館充実の希望が実現され，同年10月に現在の分館が出来上った。現在，閲覧室（事務室を含む)。複写室・書庫・保存書庫・夜間閲覧室のそれぞれの部屋をもっている。改築当時多少ゆとりの感じられた閲覧室は，現在，当時から較べると２倍近くの学生および研究者たちによって利用され，また書架の設置，冷暖房器具の取付けなどによって残されたスペースも少なくなった。あと２，３年すれば飽和状態をきたしそうな様相である。従って将来は学部学生用閲覧室と大学院以上教官，研究者用閲覧室を別にしなければならないと思われる。夜間閲覧室は，現在のところ，開館時間内に資料を借出しておき，夜間に部屋だけを利用するシステムになっているが，将来，図書館の閲覧時間延長に発展させたいのが利用者全部の希望である。

内部改築は一応完成されたけれども，図書館運営をふり返えると，はたして利用者に充分満足のできるような態勢ができているかどうか甚だ疑問である。これは運用面においてばかりでなく，資料構成についても言えることで，例えば雑誌のバックナムバーにしても満足のいく蔵書はほとんどない状態で，他の分館ならびに学部図書室に多く依存している現状である。そのうえ最近の著しい傾向として，１館で新しい資料を購入できる数は非常に限定されてきているので，学内で重複して購入している資料をできるだけ止めるようにして，分館として特色のある資料を構成すべきではないかと思う。

つぎに学部が小さいせいもあるかと思われるが，図書の中央集中管理はわりあい行き届いているのではないかと思う。これは分館設立当時に徹底されたことだと思うが，部内利用者だけでなく，学内相互利用においても非常に便利であり，今後もできる限り分散は避けるようにしなければならないと思う。また講座費で購入しているものでも，確実に目録が作られ，明確にlocalizeされている。

最後に先に書いた資料構成に関連するけれども，重複する資料の購入を避けるためには講座，あるいは学部中心主義から脱皮し，学内相互利用が現在よりもっと，もっと円滑化されるよう望んでいる。

分館だより

中之島分館

校費振替（１枚25円）ゼロックス複写開業　１月16日から但し年度内は中之島地区に限りサービスする。他地区へのサービスは他館の動きをみて新年度以降に開始する予定。

第６回学術映画会　43.1.25（木）2.00p.m～　「喉頭鏡気管支鏡検査におけるペントレン」カラー　20分「水の開拓者」カラー　30分

■　国立学校図書専門職員採用試験実施

人事院による今年度の国立学校図書専門職員採用試験第１次試験（筆記）が，さる10月21日～22日に全国いっせいに行なわれ，近畿地区は大阪大学が試験場となった。10数倍の難関を突破した第１次試験の合格者が11月25日に発表されたが，そのうち中部・近畿・中国・四国の各地区関係の合格者，上級（甲）２名，上級（乙）２名，中級10名に対する第２次試験（人物・身体）も12月７日本学で行なわれた。

なお，全国における今回の採用予定者は，上級（甲）６名・上級（乙）15名・中級36名の合計57名である。

日　　程

1月5日（金）　10.00 a.m.　本学図書館職員採用面接試験（中之島分館）
〃 19日（金）　（予定）　豊中地区運営委員会（本館）
〃 23日（火）　1.00 p.m.　近畿地区国公立大学図書館研修企画委員会　第３回（奈良女子大学）
2月6日（火）～8日（木）　文部省主催ドキュメンテーション講習会　第７回（松下会館４階講堂）

来　訪　者

11月6日（月）　東京大学助教授（図書館学）裏田武夫
〃 17日（金）　韓国延世大学校医科大学図書館長　金崇会
〃 20日（月）　慶応義塾大学文学部図書館学科　橋本孝主任教授　他教授陣６名
〃　〃　〃　佐賀大学附属図書館長　佐藤千代吉
〃 21日（火）　カンサス大学図書館長　トーマス・バックマン
ミシガン大学アジア図書館長　鈴木幸久
アメリカ議会図書館東洋部長　ウォーレン・常石
12月7日（木）　文部省情報図書館課長補佐　井上繁
〃 11日（月）～12日（火）
東京教育大学附属図書館長　酒井忠夫　他２名
21日（木）　東京工業大学附属図書館事務長　鳥塚新

表　　彰

総長表彰　勤続20年：藤井和夫(閲覧課長)，平林和子(運用第２掛・中之島分館)
日本医学図書館協会々長賞(功労賞)：高木耕三(元附属図書館長)，藤井和夫

大阪大学図書館報　Vol. 2 No. 1　昭和43年1月1日発行（隔月刊）　編集発行人　直木一郎
発行所　大阪大学附属図書館　豊中市待兼山町1の1　☎池田 0727(61)1125 内線2126